

中学生の友人関係における非行の抑止要因の検討

野村 菜月

これまで非行の原因に関する研究では、逸脱した友人を持っていることが、個人の非行傾向に影響することが明らかにされてきた。また、友人関係の中で、非行をしている友人との相互作用を通して、犯罪や非行を学習していくという過程にも注目されてきた。

しかしながら、これまでの研究の中で、非行をしている友人がいるにも関わらず、自分自身は非行に手を染めない子どもたちの存在も指摘されてきた。本研究では、そのような「朱に交わっても赤くならない」子どもたちに注目し、その非行の抑止要因となっているものは何なのかについて、社会的スキル、メタ認知、拒否不安、規範的同調行動、非行念慮に関する観点から、検討することを目的とした。

本研究では、中学生514名を対象として、質問紙調査を実施した。まず、非行を規定する要因について分析を行ったところ、友人の非行傾向行為と非行念慮が、直接的に個人の非行傾向行為に影響していることが明らかになった。加えて、男性は女性よりも非行念慮が自分自身の非行傾向行為に影響を及ぼし、女性は男性よりも友人の非行傾向行為が自分自身の非行傾向行為に影響を及ぼすことが明らかになった。

また、非行のタイプ別に分析を行うため、自分と友人の両者が非行をしていない〈両者なし〉群、自分のみ非行をしている〈自分のみ〉群、友人のみ非行をしている〈友人のみ〉群、自分と友人の両者が非行をしている〈両者あり〉群の4群を設定した。この4群について、1要因の分散分析を行ったところ、〈両者あり〉は他のどの群よりも非行念慮が高いという結果が得られた。〈友人のみ〉と〈両者あり〉の比較においても、〈両者あり〉は非行念慮が高く、「朱に交わっても赤くならない」子どもの非行の抑止要因となっているものは、非行念慮の低さであると示唆された。つまり、非行に対する興味の薄さや、非行をやってみたいと思う気持ちの低さが、非行そのものから距離をおくような過程に繋がっていく。加えて、〈自分のみ〉よりも〈両者あり〉の方が非行念慮の得点は高いことから、自分と同じように非行をする友人との関係性の中で過ごすことによって、お互いに影響を受けあって、より非行念慮が高くなっていくという可能性が示唆された。逸脱した友人との関係、あるいは逸脱した友人を含んだ集団の中で、行動を共にし、コミュニケーションを取り合うことによって、より高い非行への親和性を獲得することに繋がり、それが非行の深化に影響していると考えられた。